

# 図書館だより

1997. 4. 7

第19巻1号

通巻141号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



## 冬のデッサン

画と文・國田祐作

〇・ヘンリーの短篇にこんなものがある。近所のパン屋に毎日きまって白パンを一切れ買いに来る貧しい画学生がいた。顔なじみになったパン屋の女の子は画学生がこのごろ顔色が悪いのが心配である。きっと栄養が足りないんだワ。女の子はこっそり白パンにバターをたっぷり塗りこんで紙にくるんで渡した。家に戻った画学生はデッサンコンクールのお品物の最後の仕上げにパンでよごれをとろうとしている……。木炭デッサンでは消しゴムの代わりにパンを使うというのがこの話のミソ。耳タブくらいの柔らかさに指先でこねて木炭棒で描いた線を消したり調子を弱めたりする。焼きたての白パンがいちばんいい。

美術系大学の入試には木炭デッサンの実技がある。石膏像を15人ほどで取囲んで描く。午前中2時間、午後2時間、それを2日間、計8時間で仕上げる。何を描くか、それは当日まで分らない。私たちが教室に案内されて入ったとき、ブルータスが置かれていた。一瞬どよめきがあがる。予想が当たったのか跳びあがって喜んでいる受験生もいる。次に場所の抽選がある。光と影の配分がほど

よくて描きやすい横顔の位置に当たったものは大喜びである。北向きのアトリエの一方光線では逆光の場所もある。私はそこが当たった。何やら黒ずんだ塊りが目の前にある。木炭を動かし、パンで消し、布で拭き、そして悉く消し去り、一日目が終わった。翌日も同じである。どうもほかの連中のやっているような、書き順、手順というのが私には分っていない。その手順に沿って進めていけばおぼろげな形が定まってきてそこで完成される。私はそういう手順を習わずにやってきた。最後に消し去ったとき、かすかな痕跡を残す画面の前で私は放心していた。

受験生がぞろぞろと吐き出される前庭の一隅に梅林があった。植込みには椿が紅い花をつけ、ぼってりと厚くつややかな葉が光っている。北の雪の中からやってきた人間には乾いた土がどこまでも続いているのが理不盡にさえ思われる。ブルータスか、あれは、男らしい顔をしていたな。目の前に浮んでくる逆光の石膏像がいくらか懐しく感じられてくる。

(くにた ゆうさく 教養部教授 芸術論)



# 新 入 生 へ



北海学園大学附属図書館長 中 川 かず子

新入生の皆さん、入学おめでとう。大学生として、未来への夢と希望を膨らませ入学を迎えたことと思います。図書館も新入生を心から歓迎すると同時に、大学4年間の研究と思索の場としてここを大いに活用し、知性を磨かれることを期待しています。

21世紀を間近に控え、このところマスコミは「脱日本システム」とか「日本人の意識の構造改革」などと盛んに書き、新しい時代に対応できる人間づくりを提唱しています。新入生の皆さんも卒業時には既に新世紀という歴史的な巡り合わせで、直面する難題を前にいやでも意識の変換を求められることとなります。

若者たちの価値観や意識はここ10年弱の間でも変わってきています。言うまでもなく、日本社会を取り巻く内外の環境の変化が大きく影響していると考えられます。80年代後半の日本はバブル経済が進行し、円高が次第に進み国内外で経済大国として、表向きには豊かな国のイメージがつけられていました。しかし、為替の差益や土地の投機による利益の蓄積は、国民一般の生活に豊かさをもたらしてはくれませんでした。続く90年以降もバブル経済の崩壊、景気の停滞、雇用不安などといった経済不況、国外では冷戦構造の終結、民族紛争の激化、政治構造の変化等、95年には阪神大震災やサハリン事件といった社会不安をもたらした出来事……明るいニュースがあってもすぐにかき消されてしまうほど暗い事柄が多かったです。

しかし、このように日本社会を取り巻く環境が決して好ましい方向に進んでいるとは言えない状況の中、若者たちが意外にも状況を冷静に受け止め、個々の社会への関わりを積極的に行なおうとしている、というある調査結果を読み、私は溜飲の下がる思いでした。その調査とは、電通総研と

余暇開発センターが1990年と1995年に出した「世界価値観調査」で、国内の結果が96年の春に出されています。それによると、90年から95年にかけて意識がプラスに変化したのは、「余暇重視」、「労働に対する能力評価」、「親から子に継承したい価値観として責任感、忍耐力、節約心、創造力」、「自由に生きる」、「大胆に生きる」、「宗教からの安らぎ」、「秩序の維持」、「法律、警察、自衛隊への信頼度」、「政治への不信感」、「国防意識」などです。社会の変化を考えると、このような人々の意識の変化もまた当然予想できることですが、全体的には不幸や不利な状況を乗り越えるべく人知の結集と情熱を求めているように思われ、新しい「日本システム」の創造に向けてこれからの時代を担う若者たちに期待がかかります。

思えば、70年代の日本の経済成長を支えてきた「団塊の世代」は「会社人間」などと呼ばれ、従来の日本型経営システムの中でよく働き、集団の協調性を重視し、個性を主張することを抑えてきました。団塊世代はすでに50代に入ろうとし、かつて「新人類」と呼ばれた世代も40代前後になり、世代交代が進んでいます。仕事も余暇も重視し、年功序列は否定しないものの能力主義を高く評価する、他人と強調して用心深く生きるよりは個人の自由を尊重する自由で大胆な生き方に共感を覚える、といった意識をもつ人々が40代以下の圧倒的多数を占めると思われます。また、転職、フリーターといった職業選択の多様化や女性の生き方の選択の自由を認める人々が若い世代を中心に増えています。個人が自由を選択し大胆な生き方をするには、責任もまた個人でとらなければなりません。若者を中心とした層は、会社や組織への帰属意識が希薄である代わりに、自らが責任をもつ自由を選択することが多いようです。革新的な意識とは別に、現代および未来の社会に生きる若者た

ちにこれまでになかった意識が新たに芽生えました。少子化、高齢化が進むことによる人口比のアンバランス、環境汚染や環境破壊、薬害問題等々、将来の社会への不安要素が広がる現代社会の中で、問題に関心をもち積極的に取り組もうという意識が若者の間で少しずつ高まってきていること、さらに、大災害や凶悪犯罪の発生との関連で危機管理に対する関心の高まりも見逃せません。特に若い男性(20代以下および30代)の間に見られる国防意識への強い関心は、10年前の状況と比べると特徴的であることがはっきりします。

若者たちが現在および将来の社会に対して描く理想と国民全体が彼らに託す期待には大きなずれはないと思われます。物質的に豊かな社会に生きる人間は、お金よりも知識や思考の大切さを感じるようになり、政治不信や社会不安が募ると、安定した社会の建設に積極的に関わろうという健全な意識が多くの人たちに生まれます。現実から逃避する人もいますが、それは愚かな選択だといずれ自己認識を改めることになるでしょう。若者たちは危機感をもって現代社会を生きてほしいと思います。自己の存在を家庭、友人、大学、社会等で積極的にアピールするのです。それは、他人の存在を無視して自分本位の考えを主張するのではなく、周囲の人たちへの配慮を忘れずに自己主張を自由に伸びやかに行うべきだと思います。大胆で自由な発想や感覚は、これからの時代を生きるのに必要な要素となります。同時に、自由を得るためには責任もまたつきまといます。責任感も規則からの拘束も感じないようでは、人は自由を獲得することはできません。卑近な例を言いますと、「歩きながらの喫煙は禁止」、「図書館での飲食は禁止」などは規制というよりは常識ですべきでないと判断されることであるのに守れない人がいるとします。「喫煙所を作れ」、「飲食コーナーを増設せよ」はもっともな要求ですが、そのような要求の前にまず、人間としてのマナーと責任感を全うすることが大切だと思うのです。

在学期間中に皆さん方の個性と感性がさらに大きく磨かれ、新しい時代が個性豊かに形造られていくことを願って止みません。

(なかがわ かずこ 人文学部教授 日本文化学科)



## 新 着 図 書

### ● 経 済 関 係

経営用語辞典 柴川林也編 第3版 東洋経済新報社

テキストブック国際経営 山崎清編 有斐閣

中国ビジネス成功の秘訣 100のポイント 卓子旋著 日本経済新聞社

日本の経営アメリカの経営 八城政基著 日本経済新聞社

異文化インターフェイス経営 国際化と日本的経営 林吉郎著 日本経済新聞社

リエンジニアリング vs リストラクチャリング 平田周著 日刊工業新聞社

経済性工学の基礎 意志決定のための経済性分析 千住鎮雄著 新版 日本能率協会マネジメンセンター

新グローバル組織論 ダイバーシティを活かすマネジメント ロバート・T. モラン [ほか著] 安室憲一監訳 白桃書房

ネットワーク社会のセキュリティ パソコン通信の現状から見た21世紀ビジネスの危機管理 藤原宏高著 ソフトバンク出版事業部

ひとりで学べる原価計算入門 城戸宏之著 同文館出版

ひとりで学べる簿記入門 城戸宏之著 同文館出版

英文決算書入門 渋谷道夫著 日本経済新聞社

デリバティブ便覧 銀行研修社編 銀行研修社

外国人投資家 東京市場を動かす主役たち 保田圭司著 日本経済新聞社

証券業務入門 図とイラストでよくわかる 安田信託銀行編 4訂版 経済法令研究会

金融新時代の地方銀行 64行の素顔と特色 高野正樹編著 金融財政事情研究会

信託業務入門 図とイラストでよくわかる 安田信託銀行編 3訂版 経済法令研究会

自然科学と人文・社会科学とのパートナーシップ 科学技術は人類に何をなすうるか 科学技術庁科学技術政策局編 大蔵省印刷局

生産システムのリエンジニアリング ひ弱な日本の生産技術からの脱皮 江口一海著 日本能率協会マネジメンセンター

### ● 法 律 関 係

現代中国の人権 研究と資料 土屋英雄編著 信山社出版

公職追放 三代政治ページの研究 増田弘著 東京大学出版社

弾劾制度の比較研究 英米独仏日の理論的諸問題と歴史社会的条件 上 佐藤立つ夫著 原書房

ASEAN法 安田信之著 日本評論社

フランス法律用語辞典 レモン・ギリアン [編著] 三省堂

ドイツの憲法判例 ドイツ憲法判例研究会編 信山社出版

アフリカ憲法の研究 中原精一編 成文堂

民法学と比較法学の諸相 山島正夫・五十嵐清・薮重夫先生古稀記念 1 信山社出版

不法行為改革 石原治著 勁草書房

犯罪被害者の研究 宮沢浩一 [ほか] 編 成文堂

民事訴訟法判例研究 山木戸克己著 有斐閣

韓国民事訴訟法 金祥洙著 信山社出版

国際私法 桜田嘉章著 有斐閣

現代産業法講義 志津田氏治著 第2版 法律文化社

医学哲学への招待 ステュアート・スピッカー著 時空出版

ステッドマン医学大辞典 和英索引付ステッドマン医学大辞典編集委員会編 [訳] 改訂第3版 メジカルビュー社

現代医事法学 金川琢雄著 金原出版

基本医療六法 平成8年版 基本医療六法編纂委員会編 中央法規出版

(新講・)現代消費者法 佐藤一雄著 商事法務研究会

労働関係法 小西国友 [ほか] 著 第2版 有斐閣

社会福祉基本六法 誠信書房

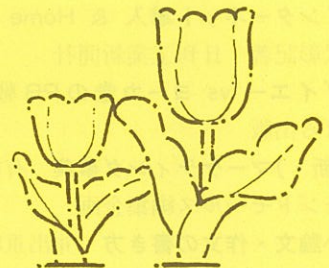
(〈資料〉)わが国の教育行政 その推移と背景 笹森健編 酒井書店

● 人 文 関 係

- DNAに魂はあるか 驚異の仮説 フランシス・クリック著 講談社
- 宇宙を語る 立花隆・対話篇 立花隆著 書籍情報社
- 平安中期記録語の研究 清水教子著 翰林書房
- 日本語と表現の工夫 景山尚之 [ほか] 著 双文社出版
- 杜家立成雑書要略 注釈と研究 日中文化交流史研究会著 翰林書房
- 論叢元祿の文学 浅野晃著 勉誠社
- 宗祇連歌の研究 両角倉一著 勉誠社
- 大伴坂上郎女の研究 浅野則子著 翰林書房
- 平安朝文学と漢文世界 渡辺秀夫著 勉誠社
- 古代叙事伝承の研究 三浦佑之著 勉誠社
- 漱石鷗外対照の試み 浅野洋編 双文社出版
- 古代和歌の成立 森朝男著 勉誠社
- 日本歌謡・芸能の周辺 浅野建二著 勉誠社
- 源氏物語とその周辺—今井卓爾先生傘寿記念論集— 勉誠社
- 古代説話の変容 風土記から日本靈異記へ 永藤靖著 勉誠社
- 雨月物語の探求 元田与市著 翰林書房
- 中上健次発言集成 1、2 中上健次著 第三文明社
- (論集)近世文学 いま熱く文学の復権を 1 近松とその周辺 小池正胤 [ほか] 編集 勉誠社
- 源氏物語作中人物論集 森一郎編著 勉誠社
- 源氏物語歴史と虚構 田中隆昭著 勉誠社
- (論集)近世文学 いま熱く文学の復権を 2 歌舞伎 小池正胤 [ほか] 編 勉誠社
- 論集近世文学 3 西鶴とその周辺 勉誠社
- ソフィーの世界 哲学者からの不思議な手紙 ヨースタイン・ゴールデン著 池田香代子訳 日本放送出版協会
- 和漢朗詠集とその享受 三木雅博著 勉誠社

● 工 学 関 係

- 食生活が人生を変える 足元からの健康づくり 東城百合子著 光雲社
- 自然に生きる 東城百合子の健康哲学 東城百合子著 地湧社
- 河川工学 須賀堯三著 朝倉書房
- 水理学 1、2 椿東一郎著 森北出版
- 河川工学 伊藤秀夫著 明現社
- パソコンで解く水理学 池田裕一著 丸善
- 最新河川工学 岩佐義朗著 森北出版
- 河川工学 吉川秀夫著 改訂版 朝倉書店
- 演習水理学 粟津清蔵 オーム社
- 演習水理学 石田昭著 森北出版
- 数値水理学 岩佐義朗編著 丸善
- 絵とき水理学 国沢正和 [ほか] 著 オーム社
- 水理学演習 鈴木幸一著 森北出版
- 水理学2 玉井信行著 培風館
- 地盤調査法 土質調査法改訂編集委員会編 地盤工学会
- 自然的河川計画 改修における自然との調和と対策 千田稔著 理工図書
- 水道の水源水質の保全 安全でおいしい水を求める日本・欧米の制度と実践 小林康彦編著 技報堂
- 水処理 その新しい展開 佐藤敦久編著 技報堂
- 実務者のための下水道 松井大悟著 新版 理工図書
- 道路・通路の裁判例 沢井裕 [ほか] 編著 有斐閣
- 路面電車時代 吉川文夫編著 大正出版



## 新 着 図 書

### ●一般・教養関係

西ヨーロッパの変容 W. ウォーレス著 鴨武彦  
訳 岩波書店

教育の日本史 竹内誠 [ほか] 編 第2版 東京  
大学出版社

ブリュッセルの招き猫 ヨーロッパ旅の絵本 林  
丈二著 同文書院

戦後日本の宰相たち 渡辺昭夫編 中央公論社  
挑戦するアジア 国際交流会議「アジアの未来」  
から 日本経済新聞社編 日本経済新聞社

ハーバードで教える企業倫理 MBA教育におけ  
るカリキュラム トーマス・R. パイパー [ほか]  
著 生産性出版

私の「起業」物語 14人の創業者が語る「サクセ  
スへの道」ビジネス戦記 朝日新聞「ウイークエ  
ンド経済」編集部編 プレジデント社

(図解でわかる)デフレ入門 インフレより怖い  
「デフレ経済」のしくみと常識 西野武彦 ばる出  
版

金融と経済がよくわかる本 原島健一著 日本  
能率協会マネジメントセンター

円とドル流説の攻防 国際通貨の政治経済学 高  
橋文利著 プレジデント社

新英語科教育の展開 塩沢利雄 [ほか] 著 英潮  
社

異文化理解とコミュニケーション 1 三修社  
現代科学自由自在 相磯秀夫編 品文社

グラフ統計のはなし 石村貞夫著 東京図書  
オゾン層破壊 紫外線による健康影響、植物・生  
態系への影響 中央法規出版

モーターサイクルの日本史 日本自動車工業会  
『Motorcycle information』編集委員会編 山海  
堂

インターネット導入 & Home Page 活用ガイド  
沢彰記著 日刊工業新聞社

ダイエー vs ヨーカ堂のPB戦略 溝上幸伸著  
ばる出版

(新・)マーケティング事典 有田恭助著 ダイヤ  
モンドセールス編集企画

小論文・作文の書き方 井出重昭著 西東社

## ジョンバチェラー博士

1940年(昭和15年)12月、後髪を引かれる思  
いで、カナダに向かうあたりの事情は仁多見氏の  
“異境の使徒”に記されている。戦争が酷になっ  
てからの消息を掴むのは困難であるが、バチェラー  
師が英国に戻った時の地方紙が伝えている報道を  
探してみた。ハートフォード州マーキュリー紙  
1943年8月27日付は、日本の狙いと題して帰国  
したばかりのバチェラー師談を掲載している。こ  
こでちょっと説明を加えたいが、Hertfordshire  
はロンドンの北部にある州で、Uckfieldのある南  
のSurrey州とは違う。前回の稿で師が郷里 Uck-  
fieldに落ち着いたかのごとく書いたが、実際は亡  
妻ルイザ、その姪のフランシス嬢の出身地ハート  
フォード町に戻ったのである。

さて、紙はバチェラー師の功績を略記した後、日  
本の恐るべき侵略意図に師自身驚いている訳では  
ないとし「日本はインドを攻略、そこを拠点にし  
て勢力を拡げようとしているが、今やその意図は  
阻まれつつある。」「日本人は優越意識の高い人達  
で西欧人を劣等だと思っている。とはいうものの  
戦争自体は軍部が指導していることで市井の人の  
意図するところではない。私に日本人友人は多い。  
それにしても日本人の考え方は我々のそれとは随  
分と違うものだ。」と述懐させている。副題をお役  
所との長い闘いとしてあり、アイヌの人々の権利  
返還のために力を尽くした事を述べ、なかでも言  
語保存の努力は絶大だったとする。戦局が険しく  
なっていく中での日本で、1938年バチェラー師は  
NHK東京中央放送局から“62年間の滞日感想”  
という題で海外向け放送をしているが、“聖戦”を  
支持するようなことは言わされないまでも微妙な  
本音を吐くことは許されなかったであろう。しか  
し、マーキュリー紙は故国の新聞である。敵国か  
ら居ずらくなって帰還したミッシヨナリーの本音

## の郷里を訪ねて (2)

Cornish 箕子

を記者は期待したかもしれない。然しながら、記事は淡々と続く。「ハートフォードの故サミュエルアンドリュース氏の娘ルイザと1884年に東京の英国領事館で結婚したが、「爾来56年もの間バチラー夫人は夫を助けてアイヌ教育に携わった。1936年に他界している。同年師は当地を訪れ、姪のフロレンスに來日を請う。彼女はYWCAやCAWGで活躍、博物館勤めの弟をもつハートフォード町ではよく知られたアンドリュース家の出である。伯母の死語、伯父の『アイヌ 和 英語辞典』の四版改訂を手伝うために渡日することになった。」と述べる。同嬢が師を助ける理由として挙げられているのが師の英語である。大執事は余にも東洋での滞在が長い日本アイヌ語には通曉しているものの肝腎の母語に錆びが付いてきた。Englishの妙味や穿った表現などが判らなくなっているのではないかと……。尤もこれはバチラー師自身が笑いとばして言ったことかもしれない。師とフロレンス嬢の戻る経緯については「戦争が始まると同時に、滞在は三日しか延ばせないとの通告を受けたが、もうひとつ、日本政府が12カ月滞在旅券申請は可能だと条件をつけてきた。そこで、師はくとも角6カ月の休暇を取ろう」と目論む。CANADA British Columbiaに住む甥のSydney Andrewsを頼って渡航、1941年1月にバンクーヴァー島に着く。過ぐること一年、望郷の念つりロッキー山脈を越えたむこう側のモントリオールに移った。

幸いなことに、ここで日本に23年も滞在していたという教会参事のポールズ夫妻に迎えられ世話を受けて一応しあわせではあったが帰国の便には絶えず気を配った。戦況悪しく、殆ど不可能に思われる中、今年早々にもしかしたらとの報を得、すわとばかり申込を行ったところ、番が回って来る

のは来年の四月になってしまうと告げられる。ところが又もや一転、運が開けて今夏急に航海可能になった。両氏はひとまずリスボンまで海路を、そこから一気に飛行機で英国へ、そして二、三日前ハートフォードに無事到着したという次第である。親戚一同、知人、友人の歓迎ぶりには一方ならぬものがあった。」とし、日本を1940年冬に発ち、実に三年近くの歳月を費やして戻って来たこの希有のミッシヨナリーに静かな賛辞を送っている文調である。最後に、「高齢にも拘わらず、バチラー大執事は敵対関係が終われば極東に戻ってし残して来た仕事にとりかかりたいとの意欲を燃やしている。ところが、アンドルーズ嬢はくいえいえ、伯父はもうここハートフォードの住人として余生を送ります」と記者には語った。」と結んでいる。出身地 Uckfield には同年秋には訪れていて、HOLY CROSS CHURCH でお説教を行っている。多分それが最後の写真ではなかろうかと思われるものが師の業績を称えながらの死亡記事に載せてあった。これは Surrey 州の Uckfield 地方紙である。甥の William Batchelor とたわわに実った林檎の木の前で温容を綻ばせている。この甥は師に一番近い人であったのだろう。サマーセットハウス(遺言検認登記本所)で照覧したバチラー大執事の遺書には、庭師 William Batchelor に295ポンド11シリング11ペンスを残すと記してあった。その当時の額としては悪くはないかもしれないが、Archdeaconの身分の人としては非常に低い。与えることに徹した人の貴重な最後のお金だったのだ。

Setsuko Cornish march 2nd 1997  
(セツコ コーニッシ ロンドン大学)

# はじめての卒業論文

村山 出

本学の人文学部にとって、最初の卒業論文が提出されました。

日本文化学科と英米文化学科とでは条件の違いはありますが、卒業予定者の全員から提出されました。大変に嬉しいことです。すこしおおげさに表現すると、人文学部の記念すべき卒論第1年をとにかくも迎えることができました。

卒論の指導にあたられた先生がたと同じように、私も学生諸君の労作を読みつつ、この年末年始を過ごしました。自分自身が卒論を書いた時に味わった苦渋をもかさねあわせながら――。

学生諸君は実際にとりかかってみると、これまでに何度か書いたレポートとは勝手が違って、自分の研究の成果をまとめることの大変さに気づき、かなり困惑したようです。

おおまかに主題はさだめたものの、まず具体的な論点を絞るのに迷い、見通しをつけたところで参考文献をさがすのに思いがけなく時間をとられ、集めた関連論文を読んで研究史的に整理し、自分のもくろみを確認めたり修正したり、あるいは諸論文から学んで自分の主張を実証と論理によって論に築いてゆくのおびただしい労力をついやし、その結果を論文形式に構成して原稿用紙に記述する段になって、原稿用紙にどう清書すればよいのか、扉は？ 目次は？ 章節の立て方は？ 引用文の位置は？ 注の書き方は？ 参考文献のあげ方は？ など、こまかな点にとまどっていたようです。

こういった経過をたどって、論文を作成する初歩的なノウハウを実践し、完成にこぎつけるまでのすべてを初めて経験したわけです。論旨の展開を論文という表現方式に結びつけることの難しさをそこで体験したことは、大きな収穫であったと思います。そのプロセスにおける学生諸君の混迷、焦燥、不安と自信の交錯の様子は、その一人ひと

りの能力と努力を信じてはいても、かたわらで見えていて相当に辛いものがありました。しかし、越えなければならない峠を、観察と分析と論理の展開と記述など総合的な力を駆使してよく越えた、というのが論文の内容に触れて得た実感です。

経験してみなければ事柄の真意はわからないとよく言われますが、そのことの意義を本当に理解することのできた卒論体験であったと思います。

学生諸君はさらに大変重要なことを知ったはずです。自分の思考内容を発展させるために、どれほど多くの先人の思考の蓄積に負うところが多いかということです。先行論文の示唆なくしては、あるいはそれに対する批判なくしては、自分の漠然とした想像を推論・仮説の域へ発展させることはほとんど不可能であったろうと思います。そのことを、学生諸君は論文作成のプロセスで痛切に覚ったであろうと思います。

その点から、改めて専門的な図書・雑誌の価値と、大学図書館のもつ意義を確認することができたであろうと思います。

人文学部、特に日本文化学科では論文が必修であることもあって、本学図書館は可能な範囲で卒業年次生に文献利用の便宜を図って下さいました。これは中川館長と事務長をはじめとする職員皆さんの深いご理解とご協力があって初めて実現したことで、深く感謝申し上げます。

本学図書館の貴重な学術図書・雑誌の蓄積は、その量と内容において驚嘆すべきものがあります。しかし、人文学部の専門教育・研究のためには、一層学術図書・雑誌の充実が必要で、学部として既に計画をもっており、逐次図書の整備につとめなければなりません。各方面のご理解とご協力をお願い申し上げたいと思います。

(むらやま いずる 人文学部教授 日本文化学科)



# オランダを知っていますか？

岡崎 敦男

私たちにとって、オランダは影の薄い国である。アメリカの大都市にそれぞれ一冊の案内書があるのと対照的に、オランダはベルギー・ルクセンブルグとあわせてやっと一冊の案内書にしかない。多くの人が、オランダは17世紀に繁栄を極めたが、今では往時の栄光は見る影もないと思っているようだ。私も、アムステルダム大学天文学科に95年9月から一年間滞在するまでは、オランダについて本当に断片的な知識しかもっていなかった。「アムステルダムでは治安が悪く、殺人発生率も高い」と聞き、ちょっと不安に感じたりもしていたのである。

実際には、アムステルダムでの生活はすこぶる快適なものだった。個人の責任と自由を重んじるオランダ流の考え方が私には心地よかったのである。危険な場所を避けるようにしていれば、危ない目に遭わずに暮らせることもわかった。なにより、街には自由な雰囲気があり、人々は明るかった。私は、趣味がそのまま職業となったような人間なので、平均的な日本人よりも楽しく暮らしていると思うが、その私から見ても、オランダの人たちは本当にリラックスしていて、毎日を楽しく自由に暮らしているように見えた。仕事中でも彼らの楽しそうな様子は変わらない。一緒にいるとこちらまでつられて浮き浮きしてくるほどだ。

オランダの人たちの暮らしは、基本的には質素である。それを質実剛健ととるか、野暮ととるかは見る人の価値観による。例えば、彼らは服装にこだわることはない。街を歩いていても、日本で普通に見かけるようなパリッとした服装の人を見かけることはあまりない。このようなオランダの人たちの生活態度を一番よく表しているのがオランダの自転車だろう。

土地の起伏のほとんどないオランダでは、自転

車が移動の手段としてよく用いられる。自転車はオランダ人の生活の足である。一方、人口90万人のアムステルダムでは、自転車の盗難が一年間に10万件も発生する。そこで、人々は、盗まれる危険性を低くするために、頑丈な鍵のついた古い自転車に乗ることになる。それらは、日本でなら恥ずかしくて乗れないような、あるいはとっくの昔に捨てられてしまっているような、古くいかつい自転車である。もちろん、古い自転車は頻繁に故障する。しかし、Do-It-Yourselfの盛んなこの国には、自転車の修理を苦にするような人はいない。たいていの人には自転車修理キットを持ち歩いているし、大学の事務室にも修理キットが置かれている。外見を気にしないオランダの人たちは、老いても若きも男も女もこのような自転車にまたがり道路を疾走する。

私たちは、日本が先進国であると考えている。しかし、オランダで暮らしてみて、私は、「こんな風な生き方もあるのか」と目から鱗が落ちる思いを味わった。本稿ではオランダの人たちの質素な面のみを強調してしまったが、彼らは仕事でも生活でも、本当に楽しむことが上手である。私には、オランダが日本よりも何十年も進んでいる国のように思える。日本に帰ってきて、約2カ月間は、街中や大学ですれ違う人たちの不機嫌そうな表情に違和感を感じたものである。そのような表情にすっかり慣れた今、私は、自分もまた同じ表情をしているのではないかと想像し、ちょっと不安に感じている。「リラックス、リラックス」という彼らの声が聞こえてきそうである。

(おかざき あつお 教養部助教授 宇宙科学)

# 毛利元就と長州維新展

(図書展示会 No.26)

## 《山口県人の系譜》

期間：平成9年3月10日～9年6月30日

場所：図書館1F自由閲覧室

### [資料展示順]

#### 〈毛利元就関係〉

- 中国・四国地方地図：ふるさと日本列島第7巻  
中国・四国 毎日新聞社 291.08 F94
- 戦国大名の配置；永禄元年（1558）→天正元年  
（1573）→天正10年（1582） 体系日本の歴史7  
戦国大名 小学館 210.08 Ta22
- 戦国合戦地図～毛利領国拡大図～：朝日百科  
日本の歴史6 中世から近世へ 朝日新聞社  
210.08 A82
- 毛利元就画像・鎧・刀・軍肩印等：戦乱の日本  
史 [合戦と人物] 8 戦国の群雄 [西国・奥羽]  
第一法規 210.08 Se72
- 毛利元就自筆書状〔複製〕：大日本古文書家わけ  
第8 毛利家文書の2 東大出版会 210.08  
D25
- 毛利氏系図：日本の名族9 中国編 新人物往来  
社 288.2 C42
- 毛利元就人物評論：史学雑誌第13編第12号
- 毛利記：続群書類従第22集下（巻第642）  
081 G94
- 毛利元就記：改定史籍集覧第15冊 別記類  
自186至217 [北駕文庫・双書の部]
- 毛利隆元・吉川元春・小早川隆景画像：歴史発  
見14 NHK取材班 210.1 N69
- 吉川系譜：続群書類従第6集下（巻第160）  
081 G94
- 大内義隆画像：大内義隆 福尾 猛市郎 人物  
双書16 吉川弘文館 280.8 J52
- 尼子経久自筆書状〔複製〕：大日本古文書家わけ  
第9 吉川家文書の1 東大出版会 210.08  
D25
- 毛利氏の菩提所 東光寺：俳句の旅7 中国  
ぎょうせい 911.308 H15
- 長州藩主 毛利敬親公肖像：松菊木戸公傳上  
明治書院 昭和2年 289.1 Ki13
- 城下町 萩の町並み 毎日新聞社 291.09  
Ka21
- 錦帯橋（山口県岩国市） 新編日本の旅12 山  
陰・山陽 小学館 291.09 N77
- 厳島の戦い・宮島（広島県佐伯郡宮島町）：空中  
散歩日本の旅11 中国 新日本法規 291.09  
Ku15  
ほか26冊

#### 〈長州維新史関係〉

- 維新史年表：維新の内乱 石井 孝 至誠堂  
210.61 I75
- 勝 海舟、吉田松陰、高杉晋作、西郷隆盛らの  
漢詩 維新史料双書34 雑2（日本史籍協会双書  
別編32） 東大出版会 210.61 I79
- 長州藩参勤入府の図・江戸桜田邸（長州藩上屋  
敷）図 江戸時代人づくり風土記35 山口県 農  
文協 210.5 H77
- 幕末維新の長州藩；高杉晋作・奇兵隊の旗：歴史と  
文学の回廊第11巻 中国 風土社 291.02 R25
- 下関戦争（元治元年8月5日）；イギリスに占拠  
された前田御茶屋低台場：写真集よみがえる幕  
末 朝日新聞社 210.58 G72
- 長州諸隊書簡・高杉晋作書簡：維新史料双書6  
書簡1（日本史籍協会双書 別編6） 東大出版  
会 210.61 I79
- 長州藩勤王王家血盟書：維新史料双書40 雑8  
（日本史籍協会双書 別編40） 東大出版会  
210.61 I79
- 奇兵隊の略歴：維新史料双書37 雑5（日本史籍  
協会双書 別編37） 東大出版会 210.61 I79
- 吉田松陰画像：吉田松陰全集第1巻 山口県教  
育会編 大和書房 081 Y81
- 吉田松陰略年譜：ライバル日本史6 NHK取  
材班 281 R49
- 吉田松陰 西洋歩兵論：維新史料双書3 雑記  
（日本史籍協会双書 別編3）
- 明治の教科書上の吉田松陰：高等小学校読本8  
文部省著作 [北駕文庫・教育の部]
- 松下村塾・明倫館：日本の文化遺産 東京記者  
クラブ 372.1 N77
- 修訂 防長回天史 末松謙澄 柏書房 1980  
217.7 Su17
- 勝 海舟画像：開国起原上・下 勝 海舟（明  
治百年双書46・47） 原書房 210.08 Me25
- 奇兵隊軍監時代の山縣公：公爵山縣有朋伝上・下  
（明治百年双書88・89） 原書房 210.08 Me25
- 岸 信介（山口県出身総理大臣）：防長風土記  
野村春畝 青雲社 217.6 N95
- 佐藤栄作（ ）：日本国会百年史314.1  
Ko41  
ほか25冊

# 留学生リレーエッセイ

銭 烽

(中国 杭州出身)

## 遥かなる便り

それは、三年前の春のことでした。中国上海の空港で、両親や親戚に見送られ、僕は大きな志を抱いて、未知の世界「日本」を目指して旅立ちました。だが、その日の夕方、目的地の札幌に着いたとたん、急に不安で一杯になりました。

その夜、保証人さんの家の白い電話機で、朝別れたばかりの両親と繋がりました。小さな受話器を握って、両親の声が聞こえた時、ひとりぼっちの不安感が消え去りました。その時何を話したか、覚えていませんが何だか必要ないほど焦って、とても大きな声で話したと思います。

日本に来てから八カ月後、冬が訪れて、南方生まれの僕は北海道の雪に驚きました。いくら遠くを見渡しても、辺り一面雪また雪でした。ちらちらと降っている雪の中で、僕はお正月を迎えていました。「あなたの年賀状が届いたので、近頃の様子も少しずつ分かるようになりました。皆がほっとしましたが、お正月の間にもう電話しなくても結構ですよ。なんでも節約しなくちゃ。」と母は年賀状に書いてきました。僕は繰り返し年賀状を読みながら、家族と一緒に過ごしたお正月のことを思い浮かべました。窓の外は、まだ雪が降っていたようでしたが、ついに、僕はコートをつかんで、玄関を出て電話ボックスへ走りました。

新しい年になって初めての挨拶が、真っ暗な夜を通り抜けて両親に伝えられました。受話器を元に戻したときに、僕はその電話コードを見つめながら、子どもの時父と一緒に凧をあげたことを思い出しました。一本の細く長い電話回線は、まさに凧を引っ張る糸のように見えました。僕も、両親も電話回線を通じてお互いの存在を感じながら、家族は一つにまとまりました。

## 心の中の虹

国道36号線は、一本の動脈のように札幌市の東南を通り抜けています。毎日のように沢山の人や車が通って、この街のいきいきとした表情を人々に伝えています。

それはある日、僕が36号線を通りかかった時のことでした。雨雲の切れたところからなんと七色の虹が見えました。

長い間都会で暮らしている僕にとって、久々のことでした。僕は、一瞬の間に心から沸き上がってきた喜びを周りの人々に伝えたくなってきました。

だが、すすいと走っていく車の流れの中で、人々はまるで見ていないようで、黙ってひたすら歩いていました。僕はがっかりした気持ちで、一人で道に佇んでその虹を眺めていました。

毎日、大都会の中で忙しい生活を送っている人々は、新鮮な空気や綺麗な景色を求めて自然の中で過ごしたがっています。様々な広告やコマーシャルなども人々の自然への憧れに上手く訴えかけています。

ところが、私たちが暮らしているこの現実の街に現れた虹を落ち着いて眺める人はいないようです。たとえ一瞬の眺めでも！

僕がそんなことを考えている間に、綺麗な虹の姿も段々と消えていきました。僕も人々の流れに従って、歩きはじめました。

しかし、この街のどこかで、きっと僕のようにその七色の虹を眺めていた人がいるはずです。これからも逢えない見知らぬ者同士でも、あの虹を見た一瞬の喜びは共通のものだと思います。僕はそういう人の存在を感じた時、なんだか少し嬉しくなってきました。

(せん ほう 人文学部 日本文化学科3年)

# 傳(でん)と傳(ふ)のことなど

～その一～

石村 義典

旧漢字との出会い、漢字林にわけいる日々をもっている。指にペンダコをつくって、友と漢字練習を競争した国民学校高学年の時間をなつかしみ、それが無駄でなかったことを確かめることがある。そんななか思考が一文章の一文字に凝固したことがあった。

○明治四十二年八月六日 韓国太子李垠・太傅伊藤博文来道、札幌・新冠御料牧場等巡覧

この文章の「傳」の文字である。「太傅伊藤博文」と読みうけとっていたが、「傳」は「傳=伝」ではなく、「傳」(かしづく、もり、守り役)であった。河野常吉編纂になる北海道史付録第一の年表の文章である。積みば自己の背よりも高くなるという河野常吉の著作をふくむ、彼ののこした「河野常吉資料」のなかからやっと見出した関連資料は短文2点で、引用した河野北海道史の一行足らずの文章の歴史事実を理解したうえで追跡作業であったが、私にはその草書の字体は「伝」以外には読みとれないものであった。この読み違いはこの文章の歴史的事実は十分にうけとめていたつもりであったが、伊藤博文の果たした役割を理解していなかったことにあったと思う。

明治四十二(1909)年韓国皇太子李垠行啓という歴史事実の重さを発見指摘したのは元北法工学部助教授の秋月俊幸氏である。(北大時報 398 シリーズ学内の美術—その22—) その秋月氏から私がお教示、手持ちの資料をいただき、抹消された「韓国皇太子李垠行啓」という歴史事実の重さをうけとめることになった。韓国皇太子李垠の北海道行啓は韓国併合の前年のことで、その来道は独立国の皇太子の「行啓」であった。その官民あげての歓迎演出を報じた、その月の新聞は道内

には欠落している。このことは韓国皇太子李垠の行啓の順路にあたった東北諸県の公的機関の所蔵状況と一致する。この新聞の欠落は偶然とみるには、あまりにも見事で「作為」としかうけとれない。これも秋月氏の指摘するところである。

新撰北海道史、新北海道史の年表にこの韓国皇太子李垠行啓を追跡してみると、

八月六日韓国太子李垠、太傅伊藤博文来道(新撰北海道史)(「太傅」となっている)

8.6 韓国太子李垠・太傅伊藤博文来道(新北海道史)

新撰、新北海道史ともに河野北海道史の記述をそのまま借用したものであるが、新撰北海道史はその歴史事実を理解しないことによる誤記、新北海道史は河野北海道史に忠実に依拠しているが、その活字の「傳」は字形の正確さを得ていない。この一事をとってみても、三北海道史の精粗を知り、河野北海道史のこゆるべからざる大きさ、重さを知る。

伊藤博文の肩書「太傅」の典拠の追跡に成功していない。明治四十年十一月伊藤博文は韓国宮廷から「太子太師」に託任されているのを知るのみである。

(いしむら よしのり 北駕文庫担当)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.19 No.1 (通巻141号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所: 懶アイワード